

# 東日本大震災以後の備忘録ないしは切り抜き帳(その73)

[2018年2月7日(水)]

○先日の日曜日に行われた沖縄の名護市長選について、翌日の琉球新報は『3458票差“辺野古外し”の渡具知氏が当選した理由と課題(名護市長選)』と題する記事を掲載していたので、以下に転載させて頂く。「沖縄県の米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設問題が最大の争点となった名護市長選は、移設を推進する政府与党から全面支援を受けた渡具知武豊氏(56)が勝利した。1996年に米軍普天間飛行場の返還合意がされ、辺野古が移設先に浮上して以来20年以上、移設是非の選択を迫られ苦悩してきた市民は渡具知氏の市政中心の訴えを選んだ。辺野古移設阻止を掲げた稲嶺進氏(72)に対して、渡具知氏は辺野古を争点化しない戦術を徹底した。「稲嶺市政2期8年で名護市は取り残された。閉塞感が漂っている」として、市政刷新と経済振興を前面に掲げて戦った。支援する政府、自民党も国政選挙並みの態勢で臨み、菅義偉官房長官や二階俊博幹事長ら幹部を次々と名護入りさせ、企業や団体の組織票を固めた。政府は2017年4月に護岸工事に着手。11月には石材の海上搬送を始め、ことし1月には5本目となる護岸に着手した。名護市長選を見据え、目に見える形で工事を加速させた。市民の中に「反対しても工事は止められない」との諦めムードが漂う中、経済振興を掲げる渡具知氏の訴えが浸透した。一方、今選挙にあたり実施した本紙合同世論調査でも、66%が辺野古移設に「反対」「どちらかといえば反対」と回答している。辺野古問題が名護市の最大の課題と言える。渡具知氏の勝利には移設反対の声が市民の中に根強くあることも示している。渡具知氏は選挙戦では移設の是非を示していない。一方で「国にべったりとはいかない。一定の距離感を置いて基地問題と向き合う」とも話している。移設反対の民意と、支援を受けた政府にどう向き合い、経済振興に取り組むか。手腕が問われる。(署名記事)」



当選確実の一報がテレビ画面で流れ、画面を見入る渡具知武豊氏(前列中央)と支持者ら=4日午後10時半すぎ、名護市大南の選挙事務所(2月5日付け琉球新報より)

**本音のコラム**

四日、沖縄県名護市長選で与党推薦の渡具知武豊氏が当選。止まっていた米軍再編交付金を政府は再開する方針という。なんじやそりや。あんなは鳥取城を兵糧攻めで落とすに秀吉か！

あまり露骨な対応に頭から湯気が出てしまったが、頭を冷やして過去に遡ってみた。普天間飛行場の辺野古移設に反対する稲嶺進氏が市長選で初当選したのは二〇一〇年一月。直後に再編交付金は止められた。菅直人政権の時代。民主党よマエモカ、である。

しかし、さこの潮を〇七年、第一次安倍政権の時代に行き着く。この

年の五月に成立した「在日米軍再編特別措置法」が諸悪の根源で、以来、政府案をのむか否かで交付金支給の是非が決定されてきた。

この措置で、沖縄県の金武町、恩納村、宜野座村は次々降伏。住民投票で空母艦載機の移駐に反対の民意が示された山口県岩国市も、米陸軍司令部の新設に反対してきた神奈川県座間市も、市長が苦渋の決断の末に返還した。それでも名護市は交付金に頼らな行政を貫いて、全学校の冷房設置や校舎の耐震化、小中学生の医療費無料化まで実現させたのだ。

選挙中、自民党は交付金の再開を当然らうかせた。それ、札束の力で自治体をねじ伏せ、住民を分断させる恫喝政治。これ、民主主義なんですか。(文芸評論家)

○この名護市長選に関連して、東京新聞の本音のコラムでは、今朝の斎藤美奈子氏の『兵糧攻め』で毎度のことながら手厳しい論評を加えている。同氏の指摘する「政府案をのむか否かで交付金支給の是非が決定されてきた」との言は全くその通りで、これまでも為政者によって延々と続けられてきたことであるが、このようなあからさまな地方自治体いじめが甚だ卑怯でみっともないことであると、為政者や周辺のお役人たちはどうして気が付かないのだろうか。

**本音のコラム**

四日に投票が行われた沖縄県名護市長選で、前市議で新選の渡具知武豊氏(56)が、現職の稲嶺進氏(72)に民進、共産、自由、社民、沖縄社大推薦、立民支持を破り、初当選を果たした。日本では、これに辺野古新基地建設に反対するオパール沖縄の一角が崩れ、沖縄の民意が新基地建設容認に傾き始めているとの見方が強いが、それは間違っていた。実は渡具知氏は、辺野古新基地建設について態度を表明していない。当選後も「移設を容認するわけではない。今は答えられない(六日「琉球新報」と述べている。

大民族である日本人は、少数派である沖縄人の複雑な心情がよくわからない。母親が沖縄・久米島の出身で、沖縄人と日本人の複合イメージに「アイチー」を持っていない筆者は、名護市の有権者の心情が皮膚感覚でわかる。沖縄人にとって、ヤマト(日本)は怖い国なのだ。中央政府と党幹部が目玉として、地元の業界を締め付ける司法は、沖縄の民意に耳を傾けない。日本人の大多数も沖縄の米軍基地過剰負担を解消しようとしていない。こういう状況でヤマトと表すことはとても怖い。沖縄では、我慢する。我慢の一形態なのである。恫喝政治に対してわれわれは粘り強く沖縄流の抵抗を貫く。(作家・元外務省主任分析官)

[2018年2月9日(金)]

○今朝の東京新聞には『我慢と抵抗』と題する佐藤優氏のコラムが掲載されていた。題材は同じく先日来的名護市長選であるが、斎藤美奈子氏とは全く異なる沖縄人の視点から、本音を吐露されているように思われる。「こういう状況でヤマトと表だたいさかいを起すことはとても怖い。沖縄では、我慢することも抵抗の一形態なのである。恫喝政治に対してわれわれは粘り強く沖縄流の抵抗を貫く」これほど心に響く言葉は他に見当たらないのではないのか。

[2018年2月10日(土)]

○一昨日と昨日の両日、みなとみらい地区のパシフィコ横浜で開催された『第22回「震災対策技術展」横浜』

に参加した。この震災対策技術は展示コーナーがとても充実しており、同時に開催されるセミナーも楽しいので、ここ数年は殆ど毎回参加させて頂いている。今回の展示コーナーの中で特に注意を惹いたのは、例えば最先端の研究内容を市民にも解りやすく紹介していた、防災科学技術研究所や工学院大学などの展示であった。前者の地震ハザードステーションに関する展示はさすがであり、我が家の地盤条件や地震危険度を即座にモニターに表現して見せるJ-SHISのデモも好評であったと思われる。後者は地元の行政に協力して、新宿駅周辺地域における震災対策を提言しており、「揺れた時、なるべくその場に留まろう」、「その場がダメなら、駅よりも公園に行こう」との呼びかけが、極めて単純でありながら長年の研究の成果であるところに感銘を受けた。地方自治体の出展も多かったが、特に印象に残ったのは静岡県や高知県の津波対策であった。日本建築学会の市民講座『人を守る最新の防災技術—ドローン、SNSによる画像情報を如何に利用できるか—』によれば、災害時におけるドローンの活用には各種の制約が伴うとのことであったが、(株)危機管理教育研究所の開発になる有人飛行のエンジン付きパラグライダー(左下の写真)によれば、ドローンと軽飛行機・ヘリコプターとの空白域を埋めることが可能とのこと、会場で見せて頂いた熊本地震や九州北部豪雨災害の空撮画像は見事なものであった。二日目には日本地震工学会が主催する『過去の大震災の復興から学ぶ震災復興』と題する市民講座(シンポジウム?)に参加させて頂いた。武村雅之氏(名大教授)による「関東大震災：復興百年誌」、村尾修氏(東北大教授)による「東日本大震災の復興過程と現状」、阪本真由美氏(兵庫県立大准教授)による「阪神・淡路大震災と被災者支援—命をつなぐために—」と三つの話題が準備されていたので、時代を異にする三つの大震災の復興過程の違いを良く理解することができた。とりわけ阪本氏が「災害復旧・復興過程で命を守る対策の脆弱性」すなわち震災関連死の問題に注目されていたのが強く印象に残った。



- 今日の東京新聞夕刊に『石牟礼道子さん死去 90歳 「苦海浄土」水俣病描く』の記事が掲載されていたので以下に転載させて頂きたい。「高度成長の矛盾を象徴する水俣病の悲惨な実態を告発した「苦海浄土」などで知られる作家の石牟礼道子さんが10日、パーキンソン病による急性増悪のため死去した。90歳。熊本県出身。出生直後、現在の天草市から水俣市に移住。1958年に、詩人谷川雁らの月刊誌「サークル村」結成に参加して文学活動を始めた。69年、水俣病患者らへの聞き書きによる記録文学「苦海浄土—わが水俣病」を刊行。方言による幻想的で美しい語りを通して、被害者らの苦しみを浮かび上がらせた。この作品が、多くの人々が水俣病に目を向けるきっかけの一つとなった。同作品で第1回大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれたが、受賞を辞退した。「苦海浄土」は未完となっていたが、2004年に完成させた。作家の池沢夏樹さんが「世界文学全集」を編集した際には、世界で読まれるべき日本文学として唯一この作品が選ばれた。石牟礼さんは著述の傍ら1968年に「水俣病対策市民会議」の結成に参加。69年の水俣病第1次提訴以降、患者らによる原因企業チッソとの自主交渉にも加わった。70年代前半の初期闘争では、患者への支援活動にも深く関わった。73年には「アジアのノーベル賞」といわれるマグサイサイ賞を受賞。2002年、水俣病をテーマに現代文明を批判する新作能「不知火」を発表した。晩年も意欲的に執筆活動を続け、13年には「石牟礼道子全集 不知火」(全17巻)を完結させた。<「苦海浄土(くがいじょうど)」> 四大公害病の一つで1956年に公式確認された水俣病をテーマに、被害の実態とともに患者と家族らの苦しみや憤りを描いた文学作品。69年に石牟礼道子さんが「わが水俣病」の副題を添えて刊行した。続編として74年に発表した「天の魚」は、シリーズの第3部に位置付けられている。第2部に当たる「神々の村」は、2004年に出版された。」 ☑ 一昨年は水俣病から60年ということで新聞紙面でも話題になり、このウェブサイトでも2016年10月22日と30日に『水俣病問題』を取り上げさせて頂いたので、ご参照いただければ幸いです。


[2018年2月13日(火)]

- 偶々、追悼/葉室麟と銘打った『河のほとりで(文春文庫)』を読んでいて、「熊本の友へ」と題する同氏の随筆の中に石牟礼道子氏について述べている箇所があったので、以下に転載させて頂きたい。「熊本市に住む、

『苦海浄土ーわが水俣病』の著者、石牟礼道子さんを訪ねてお話をうかがった。この時、石牟礼さんの俳句祈るべき天と思えど天の病む、についても語り合った。近代の矛盾が凝縮した公害であった水俣病の苦しみを知ることによって生まれた俳句だ。その時から、わずか数ヶ月後、天ではなく、大地が揺らぎ、大きな苦難が熊本を襲うことになるとは夢にも思わなかった。信ずべき大地が鳴動し、ひとびとの暮らしを壊し、脅かしたのだ。石牟礼さんは東日本大震災と福島原発事故の後に「花を奉る」という詩を書いている。

現世はいよいよ地獄とやいわん / 虚無とやいわん / ただ滅亡の世せまるを待つのみか /

ここにおいて / われらなお / 地上にひらく / 一輪の花の力を念じて合掌す

一輪の花の力を、われわれは熊本においても念じなければならないのか。今年3月にも熊本市の思想家、評論家、渡辺京二さんをお訪ねした。近代化の中で失われた日本という国を描いた『逝きし世の面影』の著者である渡辺さんに近代とは何であったのかをおうかがいしたかった。石牟礼さんと渡辺さんが長年の盟友であり、同志であり、何よりも信頼し合い、支え合ってきたことはよく知られている。『苦海浄土』はもともと「空と海のあいだに」というタイトルで、1960年代後半に渡辺さんが出していた『熊本風土記』という地元誌に連載された。さらにおふたりは水俣病患者を支援する「水俣病を告発する会」でもともに闘った。石牟礼さんは現在、パーキンソン病を患われ、渡辺さんは週5日、石牟礼さんを訪れて資料の整理や時には原稿の口述筆記などを行っている。渡辺さんは、「老老介護です」と笑って話してくれた。ともに80歳を超えている。しかもいまなお現役として活動を続けている。(以下略)  この随筆は、2016年5月5日発行『緊急復刊 アサヒグラフ 九州・熊本大地震』に掲載されたものようである。

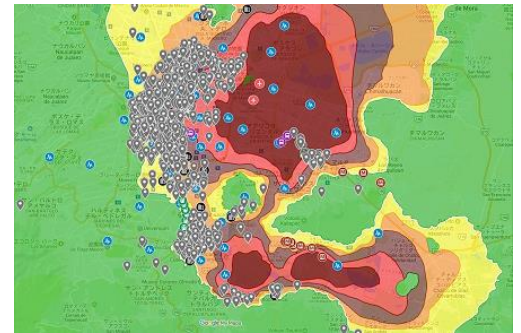
[2018年2月14日(水)]

- 今朝の東京新聞社説が漸く『石牟礼道子さん 不知火の海の精として』との追悼文を掲載してくれたので、以下に転載させて頂く。「石牟礼道子さんの魂は天草の自然とともにあり、水俣の被害者と一体だった。そしてそのまなざしは、明治以来急激に進んだ近代化への強い懐疑と、そのためになくしたもののへの思慕に満ちていた。常世とこの世のあわいに住まう人だった。童女のように笑みを浮かべて、おとぎ話を語り継ぐように深く静かに怒りを表した。「水俣川の下流のほとりに住みついているただの貧しい一主婦」(「苦海浄土」)が水俣事件に出会い、悶々たる関心と小さな使命感を持ち、これを直視し、記録しなければならないという衝動にかられて、筆を執る。事件の原因企業チッソを告発する活動家、はたまた哲学者と呼ばれることもあった人。しかし、「近代日本文学を初期化した唯一無二の文学者」だと、石牟礼さんの全集を編み、親交の深かった藤原書店店主の藤原良雄さんは言う。「自然を征服できると信じる合理的、効率的精神によって立つ近代西洋文学に、日本の近代文学も強く影響を受けてきた」。それを、いったん原点に戻した存在、ということだろう。彼女の魂は、不知火の海、そして出生地の天草、水俣の人や自然と混然一体だった。例えば、「しゅうりりえんえん」という詩とも童話ともつかぬ不思議な作品について、こう語ったことがある。「狐の言葉で書きたかった」その作品は、ふるさとの海山、ふるさとに生きとし生ける命が産み落とす熱い言霊だったのだ。「不知火海にかぎらず、わたしたちの国では、季節というものをさえ、この列島のよき文化を産んだ四季をさえ、殺しました」(「天の病む」) そんな、かけがえのない世界を、悪しき「近代」が支配する。わが身を蝕まれるほどに、耐え難いことだったに違いない。有機水銀で不知火海を侵したチッソは「近代」の象徴であり、水俣病患者ではない石牟礼さんも被害者と一体化して、その「近代」に言霊を突きつけたのではなかったか。「大廻(うまわり)の塘(とも)の再生を」。藤原さんに託した遺言だったという。塘とは土手。幼いころ遊んだ水俣川河口の渚は、チッソの工場廃棄物とともに埋め立てられた。ふと思い出した歌がある。♪悲しみと怒りにひそむ / まことの心を知るは森の精 / もののけ達だけ…(「もののけ姫」)石牟礼さんは、まこと、不知火の海の精だった。」
- 同じく今朝の東京新聞“筆洗”から引用させて頂く。「<狂せんばかりの地獄>と太宰治が「東京八景」の中で書いている。地獄とは何だったか。自分を信頼し、期待している人を裏切ってしまったことだという▼故郷の兄たちは太宰が大学を卒業してくれるものと信じていた。「学校ぐらいい卒業してくれるだろう、それくらいの誠実さをもっている奴だと、ひそかに期待していた様子だった」。しかし卒業しなかった。「私は見事に裏切った、それからの2年間、私は、その地獄の中に住んでいた」▼太宰の地獄が2年なら、この女性の苦悩は4年に及んでいたのかもしれない。平昌五輪のジャンプ女子で、銅メダルに輝いた高梨沙羅選手。競技直前の思いつめたような表情と決勝2回目が終わった後に爆発させた、笑顔と涙が印象に残る▼国際大会での実績から4年前のソチ五輪では金メダル最有力と期待されたが、4位。期待に応えられなかった自分自身への悔しさ。世間とは身勝手なところもあって、期待通りの結果を残さなければやや風向きが変わる。その風を冷たく、重く感じていたのではないかと想像する▼あの笑顔と涙は4年間の苦悩からようやく解放された喜びなのだ

ろう。ジャンプ競技は向かい風が揚力をくれる。4年もの向かい風は苦しかったろうが、五輪でのメダルにまで飛翔させた▼見事なジャンプであった。申し訳ないが今後に期待しないわけにはいかぬ。」☎ マスコミ各社は連日、金メダル、金メダルと言って冬季五輪メダルの皮算用に余念がないが、気の毒なのは期待に沿えずメダルを手にすることができなかつた選手諸君である。ことわざにも“最頂の引き倒し”と云うのがあるが、それよりも戦時中の大本営発表(筆者は直接には知る由もないが)の方が連想されて、甚だ気持ち悪い。筆洗氏の「申し訳ないが今後に期待しないわけにはいかぬ」も蛇足というものであろう。

[2018年2月18日(日)]

○2月16日に日本建築学会で開催された『メキシコ中部の地震災害調査団』速報会に参加させて頂いた。調査団は齊藤大樹氏(豊橋技術科学大学)を団長とし、日本建築学会災害委員会と日本地震工学会地震災害対応委員会の若手研究者4名で構成される小規模なもので、調査対象は昨年9月19日に発生したメキシコ中部の地震におけるメキシコ市の建築被害とのことであった。調査資料はメキシコ構造技術協会(Sociedad Mexicana de Ingenieria Estructural, SMIE)とメキシコ土木技術者団体(Colegio de Ingenieros Civiles de Mexico, CICM)から提供されたものが多く、その一部を本ウェブサイト“折々のトピックス”にも転載させて頂いた。この地震は偶然にも1985年のメキシコ地震と同じ日に発生しており、メキシコ市ではこの32年前の地震災害の追悼行事の最中での被災だったようである。速報会の会場には、この32年前の地震調査に従事した懐かしい顔ぶれも多く見られた。若手研究者を暖かく見守りつつも、会場に大変激しい質問が飛び交っていたのは、調査報告が建物被害の細部ばかりに及んで震災の全体像が一向に見えないからであったが、32年前の我々の調査も同じであったのかも知れない。一つだけ確かなことは、今回の地震動主成分が周期1秒~1.5秒と比較的短周期であったことから、被害はそれに見合った地域の低層建物に集中し、被災地はメキシコ盆地の中央部よりも盆地縁辺部に偏在していると云う傾向であった。これには震源がメキシコ市から120kmと比較的近距離であったことや、地震の規模が1985年のそれと比べて、ひとケタ小さかったことなどが影響しているものと思われる。もう一つ、同じ場所での地震災害が32年も離れると、研究者がすっかり代替わりしてしまって、研究内容の引継ぎが甚だ心許ないと云うことも痛感させられた。




メキシコ中部地震に関する被害分布や強度観測、地盤条件などの各種情報は公的機関(CICM, SMIE)のネットで公開されている。

[2018年2月20日(火)]

○東京新聞の“筆洗”は解りやすい例題つきで最新の話題にツッコミを入れられるので、いつも楽しみにしている。今朝の話題も実にタイムリーであったので以下に転載させて頂きたい。「1898年の米西戦争の期間中、米海軍の死亡率は1,000人につき9人だったそうだ。一方で、同じ期間のニューヨーク市内における死亡率は1,000人につき16人。米海軍はこの数字を使って、海軍に入った方が安全だと宣伝していたそうである▼数字のわながある。海軍の大部分が健康な青年であるのに対し、ニューヨーク市民には赤ん坊もいれば、高齢者や病人もいる。当然死亡率は高くなる▼『統計でウソをつく法』(講談社)にあった。二つの死亡率の比較に意味はないが、数字で示されるとつい信じてしまいやすい▼意図的だとすれば、見え透いた数字のトリックを使ったものである。裁量労働制の労働時間をめぐる厚生労働省のデータである。一般労働者よりも、裁量労働制で働く人の労働時間の方が短いとするデータを示していたが、調査方法に問題があった▼裁量労働制の人については実際の労働時間を、一般労働者には残業が最長の日の労働時間を調査している。これなら、裁量労働制の労働時間の方が短くなりやすいだろう。二つは比較できない数字である▼裁量労働制の対象を拡大したい政府の思惑か。厚労省は陳謝したとはいえ、ひいきの引き倒しで、裁量労働制といえば、怪しげな統計まで使って、政府が対象を拡大しようとしているものという印象と警戒が広がってしまったはずだ。統計をとるまでもない。」☎ すぐに細かい数字を持ち出す政治家には、注意が必要かも知れない。

[2018年2月21日(水)]

○東京新聞横浜版に昨日から連載されているコラムであるが、今日の記事は見逃せないの以下に転載させて頂く。タイトルは『「一瞬の夏」は終わらない カシアス内藤の挑戦(中)夢の続き、ジムに』『しびれた体は動かない。「ファイブ!シックス!」とカウントを取る声だけが聞こえてくる。「終わったんだな」。1979年8月、ソウルで行われた東洋太平洋王者決定戦で朴鐘八(パクチョンパル)に2回KO負け。次戦も敗れ30歳でリ

ングを離れた。1949年、米兵の父と日本人の母との間に生まれた。幼い頃に住み始めた横浜市中区には米軍の接収地が多く残っていたが、小学校で褐色の肌は1人だけ。同級生に石を投げられたり、かばんを隠されたりした。父は朝鮮戦争で戦死し、女手1つで育ててくれた母から「あなたは周りとは違う。何かで日本一になることでやっと認めてもらえるのよ」と言われて育った。進学先の武相高校(港北区)にボクシング部があった。身長180センチと大柄で、腕っ節に自信があった内藤は「試してやろう」と試合をした。自分より小さい相手にボコボコにされた。「悔しかった」と小学校から続けていた陸上をやめた。すぐに頭角を現し、3年で高校王者に。68年にプロデビューすると70年に日本王者、翌年には東洋王者になった。デビュー数年後から使うようになったリングネームは、憧れの米国人ボクサー、モハメド・アリのイスラム教改宗前の名前、カシアス・クレイから取った。来日時に直接訪ねて行って了解をもらった。娯楽が少ない時代。ボクシング人気は高く、重いパンチで次々と相手をなぎ倒して、22勝(10 KO)2分けの戦績を誇る男に、日本人には手が届かないとされたミドル級(69.85~72.57キロ)の世界のベルトを期待する声が高まっていった。ところが、所属ジムは利益を優先してファイトマネーが少ない海外での試合を避け、なかなか世界戦は組まれない。東洋のベルトを韓国人の柳済斗(ユジエドゥ)に奪われて一気に気力を失った。持って生まれた気の弱さと優しさもあった。試合前には足が震え、冷酷になりきれず、倒れそうな相手にとどめを刺せない。柳に3度破れ、25歳で引退した。それでもボクシングへの思いは消えずインドネシアで指導。粗末なリングで練習に励む選手を見て「自分に足りないものに気付いた」と復帰。朴との一戦に敗れグローブを置くことになるものの、その軌跡は作家沢木耕太郎のノンフィクション「一瞬の夏」に描かれ、フォークグループ「アリス」の代表曲「チャンピオン」のモデルにもなった。引退後はトラック運転手など職を転々としながら、指導は続けた。「自分と向き合い、極限まで追い込んだ末にしか味わえない勝利の達成感を伝えなかった」91年には元世界ストロー級王者井岡弘樹をジュニアフライ級との2階級制覇に導くなどトレーナーとしての実績を積んでいった。現役時代の経験から「興行優先ではなく、選手を第一に考えるジムを開きたい」。そんな思いを抱いていた内藤に病魔が迫っていた。(敬称略)  すっかり忘れていた沢木耕太郎著『一瞬の夏(上・下、新潮文庫、1984)』の感動を思い起こしている。記事の中の「持って生まれた気の弱さと優しさもあった。試合前には足が震え、冷酷になりきれず、倒れそうな相手にとどめを刺せない。」と云うところにカシアス内藤の人間味がよく現れているように思われる。『一瞬の夏』をもう一度読み直してみたい。



来日したモハメド・アリ(左)から指導を受けるカシアス内藤=1972年、東京都内で(本人提供)2月21日付け東京新聞より


[2018年2月22日(木)]

○昨日の続き『「一瞬の夏」は終わらない カシアス内藤の挑戦 (下)エディとの約束』を以下に転載させて頂く。「余命3ヵ月だと思ってください」。2004年1月、県立がんセンター(横浜市旭区)で医師から咽喉がんと告知された。まだ54歳。「エディさんとの約束を守れなくなるかもしれない」。脳裏をよぎったのはそんな思いだった。エディさんとはプロデビューから教えてくれた米国人トレーナー、エディ・タウンゼント(1914~88年)のこと。海老原博幸、ガッツ石松ら6人の世界王者を育てた名伯楽だ。カシアス内藤は74年に一度リングを去ってから4年後、29歳で現役復帰する時、エディにコーチを依頼した。エディは世界王者になること、引退後はボクシングのすばらしさを伝えるため、ジムを構えて選手を育てることの2つを条件にした。「世界王者にはなれなかったけれど、ジムを開く約束は絶対に守りたい」。医師に腫瘍の切除を勧められても「声失って指示を出せなかったらボクシングを教えられない」と断った。入院から3ヵ月後、放射線と抗がん剤の治療の効果があつたのか、奇跡的に病状の進行は止まり退院。「いつ果てるとも分からない命。今こそやらなければ」と決意し本格的に動きだした。それを聞き、カムバック後の内藤を中心に描いたノンフィクション「一瞬の夏」の著者で作家の沢木耕太郎と、内藤を撮り続けた写真家内藤利朗らが約3000万円の資金を集めてくれた。ジムの内装とリングの設営は武相高校ボクシング部時代の仲間が手掛け、エディの命日の05年2月1日、内藤は「E&Jカシアスボクシングジム」(同市中区)を開設した。それから13年一。エディのE



カシアス内藤(前列左から2人目)とジムの選手たち=横浜市中区で2月22日付け東京新聞横浜版より

と、内藤の本名・純一の頭文字Jを取って名付けたジムには現在、内藤の長男で東洋太平洋スーパーライト級王者の律樹(26)、同ミニマム級王者の小浦翼(23)をはじめ、運動不足解消のために通う人も含めて11歳～60代の約60人が所属する。ジムにはいくつか決まり事がある。一つは礼儀正しくあること。「対戦相手だって、同じようにチャンピオン目指して頑張っている仲間。計量の時はうちの選手からあいさつと握手をするよう徹底させている」内藤はジムが休みの日曜日以外は毎日顔を出し、練習が終わる午後10時から1人掃除をして帰るのを日課にしている。「翌日、一番に来る選手が気持ち良く利用できるように」との思いからだ。医師からは、いつがんが再発してもおかしくないと言われている。それが故に、一日一日を悔いのないように生きる。臆病で試合前は脚が震え、世界に手が届かなかった68歳の男は言う。「うまくできなくていい、勇気を出してリングに飛び込んでいけば、それが人生の糧になる」(敬称略)

- 今朝の東京新聞社説には『金子兜太氏死去 平和の俳句たたえつつ』と題する論説が掲載されていた。「俳人の金子兜太さんは平和の尊さを訴え続けた人だ。貫いた反戦には自らの戦争体験がある。戦後70年の2015年から本紙「平和の俳句」の選者であったのも、危うい世相への抵抗であろう。〈水脈(みお)の果て 炎天の墓碑を 置きて去る〉1944年に海軍主計中尉として西太平洋のトラック島(現在のチューク諸島)に派遣され、終戦を迎えた。捕虜になり46年に復員する。島を去るときに詠んだのが冒頭の句である。旧制水戸高校時代から本格的に俳句を始め、東大時代に加藤楸邨に師事した。43年に日本銀行に入行するも、直後に海軍へと。「炎天の墓碑」とは、何とも虚しい光景であることか。金子さんのそれまでの人生が軍国主義の時代の中であることは間違いない。たとえ詩歌の世界であっても、安易に国家や軍を批判することはできなかった。日本国憲法ができ、戦後社会はがらりと変わった。その最大の動力となったのは「表現の自由」である。文学はもとより、社会科学や自然科学の世界も自由の力で、戦後日本は躍進を遂げ、百花繚乱のにぎわいをみせたのだ。金子さんもまた、戦後の俳句改革運動の中心になった。「社会性俳句」「造形俳句」を提案、前衛俳句運動をリードし、理論的支柱となった。社会性や抽象性に富んだ無季の句を提唱したのだ。見逃せないのが平和運動に尽力したことだ。47年に日銀に復職し、被爆地の長崎で勤務したこともある。〈彎曲し 火傷し 爆心地のマラソン〉日銀時代に詠んだ句である。長崎県被爆者手帳友の会の井原東洋一会長は「体を張って権力に対抗する人という印象を持っていた」と共同通信に答えている。確かに戦後日本のありようが変わりつつある。特定秘密保護法や集団的自衛権の閣議決定、安全保障法制、憲法改正への動き…。3年間で13万句以上が集まった「平和の俳句」は、あたかも“軍事”へと向かう権力への庶民の対抗だったと思う。その意味でも選者の金子さんはまさしく「権力に対抗する人」だった。最後に寄せた自身の句は〈東西南北若々しき平和 あれよかし 白寿兜太〉戦争を知らず平和を鼻で笑う政治家が跋扈する世の中だ。「若々しき平和」を詠む俳人の死は高齢といえどあまりに惜しい。」 秩父を訪問した時に、駅前に金子兜太さんの“俳句ポスト”が置かれていたことを思い出す。誰もが気楽に俳句を楽しめるように、との配慮であったように思われる。東京新聞の「平和の俳句」にも、必ず真っ先に目を通していたことに、遅ればせながら感謝申し上げたい。

[2018年2月24日(土)]

- 今朝の『102歳の自殺 原発事故のもつ罪深さ』と題する東京新聞社説を以下に転載させて頂く。「福島第一原発事故による強制避難を前に102歳の男性が自殺した。福島地裁が東京電力に対し遺族への賠償を命じたのは、事故との因果関係を認めたからだ。原発事故の罪深さをあらためて思う。福島県飯館村。農家で生まれた男性は長男で、尋常小学校を出たあと、父母とともに農地を開拓した。牛馬を飼い、田畑を耕した。葉タバコや養蚕も…。次男の妻は共同通信に対し、「年を重ねてからは老人会で温泉に出掛け、地域の祭りでは太鼓をたたいて楽しんでいた」と答えている。99歳の白寿を祝う宴には、村中から100人近くも集まったともいう。そのとき「大好きだった相撲甚句を力強く披露した」とも次男の妻は語り、忘れられない姿となったという。2011年、原発事故が起こり、飯館村が避難区域となると知ったのは4月11日である。「やっぱりここにいたいべ」男性はこうつぶやいたという。両手で頭を抱えるようなそぶりでも下を向いた姿を見ている。2時間もテレビの前で座り込んでいた。次男の妻は「避難指示はじいちゃんにとって、『死ぬ』と言われるのと同じだった」と受け止めている。確かにそうだろう。福島地裁の判決も、男性の100年余に及ぶ人生を語っている。〈結婚や8人の子の誕生と育児、孫の誕生を経験し、次男の妻、孫と生活した。村の生活は100年余りにわたり、人生そのもので家族や地域住民との交流の場だった〉だから、避難は男性にとり、過酷なストレスとなる。科学的に言えば、降った放射性物質セシウム137の半減期は約30年。避難は長期にわたるのは必至で、これも耐えがたい苦痛である。「ちいと俺は長生きしすぎたな」と避難前にこぼした。判決は「不自由な避難生活の中で家族に介護という負担をかけるのを遠慮したと認めるのが相当」と述べた。原発事故と

避難が男性を押しつぶすストレスを与えた。そして、首を吊って自殺したのだ。原発事故での自殺をめぐる訴訟で東電への賠償命令はこれで3件目になる。一方、東日本大震災や原発事故の関連自殺者は、厚生労働省調べで2017年までに福島県は99人、岩手県や宮城県のほぼ倍だ。政府は原発再稼働の政策を進める。だが、原発事故という取り返しのつかない罪をこの判決は、われわれに思い出させる。」  
☞ 誠にくどいようではあるが、東電関係者から以前に聞かされた「福島第一原発事故では一人も死者を出さなかった」と言う言葉を、筆者は今後とも絶対に忘れることはないと思う。

[2018年2月27日(火)]

○文藝春秋の最新号で最も目を引いたのは鴻上尚史氏の『不死身の特攻兵について』であった。冒頭の一部を以下に転載させて頂きたい。「もともと、佐々木さんのことを知ったのは2009年、ある本の短い描写からでした。陸軍第1回の特攻隊『万朶(ばんだ)隊』の一員だった21歳の佐々木さんは、出撃のたびに「特攻」せず、爆弾を落として生還しました。そのたびに、上官は「次は必ず死んでこい！」と叫びました。二度、大本営は軍神として発表しました。新聞で大々的に報道され、天皇にも上奏されていたので、生きていては困るのです。それでも、佐々木さんは生きて帰りました。一度は大型船に爆弾を命中させ、もう一度は揚陸艇に至近爆発の損害を与えました。それでも、上官は体当たりを求めました。爆弾を命中させたら、その後で体当たりをしるとさえ言いました。けれど、21歳の佐々木さんは上官の命令に従わず、9回出撃し、9回生還したのです。こんな日本人がいたことに僕は衝撃を受けました。今までの「特攻」の常識を覆すような存在でした。けれど、2009年、佐々木さんの存在は遠い歴史の彼方だと思っていました。ですが、佐々木さんは生きていました。(以下略)」  
☞ この一文で紹介されていた、鴻上尚史著『不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか』(講談社現代新書)を書店で求めて、いま読ませて頂いているところである。冒頭で鴻上氏が述べておられる「ある本」が絶版となった今、鴻上氏はどうしても佐々木さんのような兵士が現実におられたことを、記録に残しておかなければとの義務感から筆を執られたに違いない。鴻上氏が実際に佐々木さんにインタビューして明らかになった事実には心底おどろかされた。これでは日本軍は太平洋戦争に勝利を収めることなど、万に一つもなかった訳である。

[2018年2月28日(水)]

○今朝の毎日新聞の『福島・公立小中 避難解除4町村、地元通学4%』と題する記事を以下に引用させて頂きたい。「東京電力福島第1原発事故で全域に出た避難指示が一部を除いて解かれ、4月に地元で学校を再開させる福島県内4町村で、地元の公立小中学校に通う児童生徒が就学対象者の約4%にとどまることが4町村への取材で判明した。避難生活の長期化で、学校や職場などの生活基盤が避難先に移ったことが主な理由。若年層の減少で地域の存続を危ぶむ4町村は、修学旅行や給食の無料化、避難先からの通学バス運行などで児童生徒の確保を図る。政府は事故後、県内11市町村に避難指示を出した。うち第1原発が立地する大熊、双葉両町を除く9市町村は放射線量が下がり、生活インフラも整ったとして昨春までに一部を除いて解除。原発廃炉や再生可能エネルギーなど新産業の集積で復興を図る街づくりが始まったが、子育て世代を中心に帰還は進んでいない。解除区域の居住率は2割弱で約半数を高齢者が占める。全域避難した自治体のうち4月に学校を再開させるのは浪江町、富岡町、飯館村、葛尾村の4町村で小中併設校を1校ずつ置く。事故後は避難先の自治体に仮設の小中学校を設けて授業を続けてきた。比較的離れた場所に多数の住民が避難している浪江、富岡両町が避難先と地元の両方で学校を運営。車で1時間ほどの距離に避難した住民の多い飯館、葛尾両村は地元のみ再開する。地元の学校に通学を希望するのは、飯館村75人(就学対象者482人)▽葛尾村18人(同83人)▽富岡町16人(同1204人)▽浪江町10人(同約1440人)。就学対象者は事故時に住民票があった子どもらで、実際の通学者には避難指示解除後に移住してきた新住民の子もいる。避難先に住んだまま地元校に通うケースが多い飯館・葛尾両村は、他の2町に比べ就学率が高くなった。地元校に通わない理由は「避難先に生活基盤が固まった」(富岡町)「子どもが避難先になじんでいる」(葛尾村)などがあがった。学校を地域再生の拠点と位置づける4町村は国の復興予算などを活用し、給食、修学旅行の無料化▽通学バスの運行▽無料の放課後塾の開講▽通学路や運動場の徹底除染—などで通学を促す。(署名記事) 国は長期支援を 浪江町の学校再開の計画づくりに携わった境野健児・福島大名誉教授(地域教育論)の話：充実を図った学校の維持費が自治体にとって負担になる心配があり、国には長期的な支援が求められる。少人数でも魅力あ



浪江町、富岡町、飯館村、葛尾村の位置  
2月28日付け毎日新聞より

る教育を地道に続け、原発事故で崩れたコミュニティーの再生のためにも、帰還した住民に開かれた学校を作る必要がある。4町村の地元校への就学率 浪江町 0.7%、富岡町 1.3%、飯館村 15.6%、葛尾村 21.7%

☒ 余計なことかも知れないが、『避難解除4町村，地元通学4%』という表題を付けたのは、毎日新聞なのかそれとも地元自治体なのか。この『4%』という数字は4町村の単純平均で、これでも十分に小さいとの意味は通じるのかも知れないが、浪江町の0.7%と葛尾村の21.7%とを、果たして同列に論じて良いのだろうか。また児童生徒が少ない飯館・葛尾両村と児童生徒が多い浪江・富岡両町を同列に論じることは可能だろうか。実は今回の問題の落とし穴は、毎日新聞自身が報じているように「比較的離れた場所に多数の住民が避難している浪江・富岡両町が避難先と地元の両方で学校を運営。車で1時間ほどの距離に避難した住民の多い飯館、葛尾両村は地元のみ再開する」点にあったのではないか。比較的離れた場所で比較的安定した避難生活をしている浪江、富岡両町の児童生徒が帰還よりも避難先に留まりたいと考えるのは当然のことではなかろうか。

2018年2月28日

文責：瀬尾和大